様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３７１１１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2018～2019
課題番号：１８Ｈ０５５９２・１９Ｋ２０８００

研究課題名（和文）イギリス・モダニズム文学における共感の変遷――ブルームズベリー・グループを中心に

研究課題名（英文）Empathy in British Modernism

研究代表者
岩崎　雅之（Iwasaki, Masayuki）

福岡大学・人文学部・講師

研究者番号：００７０６６４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、共感研究の理論を用い、E. M. ForsterとVirginia Woolfの所属していたBloomsbury Group の活動に焦点を合わせながら、イギリス・モダニズム文学における共感の変遷の一端を明らかにするものであった。イギリス・モダニズム文学における共感は、「意識の流れ」をはじめとし、様々な形を見せるものであり、ヴィクトリア朝的同情の限界を乗り越えようとする新たな歴史的感情であったことを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
共感研究は共感を歴史的産物と捉え、こと文学の分野においては「異化効果」の登場をその終点とし、歴史的・心理学的観点からモダニズム作品を再評価することを試みていたが、本研究はこの流れに与しながら、まだ詳細には論じられていなかったE. M. ForsterとVirginia Woolf、またBloomsbury Groupの作品および活動における共感の多様な姿に着目し、新たな知見を提供したという点において学術的意義が認められるものである。また、新たな異文化理解を促すという点においては、社会的にも大いに意義のあるものである。

研究成果の概要（英文）：The research project studied the representations of 'empathy' in British Literature in modernism era, focusing on the works of E. M. Forster and Virginia Woolf, members of Bloomsbury Group. The project shed light on the historical transition from Victorian 'sympathy' to modernist 'empathy,' which showed complicated relationships between the historical emotion and modernist experimental narratives such as the 'stream of consciousness.'

研究分野：英文学

キーワード：Modernism　E. M. Forster　Virginia Woolf　Bloomsbury group　Roger Fry　Empathy

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、共感研究の理論を用い、Bloomsbury Group の活動に焦点を合わせながら、イギリス・モダニズム文学における共感の表象を学際的に考察することを目的とした。その背景として、2015 年には *PMLA* が感情（emotion）に関する特集を組み、それに呼応する形で、日本では 2016 年に日本英文学会関東支部において、「近代と情動――文学、美学、哲学、心理学の相互交渉をめぐって」と題するシンポジウムが開かれるという出来事があった。研究を開始した当初は、この流れの中で、新たな方向に分岐していく共感研究が勢いを増していた。モダニズム期の作品に注目した共感研究は、アフェクト研究の取り組んでいた情動の歴史化という課題を引き継ぎながら、共感が前時代的同情（sympathy）という感情から生まれた派生物、すなわち 20 世紀的産物であると論じていた（Meghan Marie Hammond）。Adam Smith や David Hume の時代には、同情が人格の陶冶と社会発展にとって不可欠であると主張され、ロマン主義の時代には、有機的社会の建設の礎をなすものとして理想化され（William Wordsworth、Samuel Coleridge など）、ヴィクトリア朝期には、貧富の差によって生じた社会的・階級的差異や性差を乗り越えるための手段として描かれた（Charles Dickens や George Eliot など）。ところが、必ずしも同情には結び付かない他者理解と、それによって理解される社会的現実が 20 世紀に入り強く意識されるようになり、ドイツ心理学の提唱する Einfühlung という語が empathy と英訳されると、芸術の分野でも歴史的共感が主題として扱われるようになった。これまでの研究では、このような事情が明らかになっていた。

共感研究の立場に立てば、（１）モダニストたちの駆使した「意識の流れ」は、前時代的な他者理解から脱却した、新たな間主観的相互理解の表れである、（２）しかし、Bertolt Brecht が作中で「異化効果」を提示するようになった頃から、そのような傾向も収束し始めた、ということになる。共感の歴史的重要性を検討するために、2018 年 6 月には、Modernist Studies in Asia (MSIA) が、共感をテーマに学会を開催することを予定していた。このように、共感研究は共感を歴史的産物と捉え、異化効果の出現をその終点とし、こと文学においては、歴史的・心理学的観点からモダニズム作品を再評価しようとするもので、本研究はこの流れに与し、E. M. Forster と Virginia Woolf、また Bloomsbury Group の作品および活動における共感の表象を解明するということを出発点としていた。

２．研究の目的

本研究は、情動を主たる対象とするアフェクト研究の議論を踏まえながら、共感研究の理論を応用し、イギリス・モダニズム文学における他者の心理への没入、すなわち共感の表象を学際的に考察することを目的とするものであった。具体的には、イギリス近代美学の礎を作った Bloomsbury Group の活動に注目し、文学や絵画において、どのように歴史的共感が言語化・視覚化されたかを解明することを主眼としていた。当該研究の問いは、はたして文学的共感は、先行研究で論じられてきたように、その限界を乗り越えることができず、1940 年代に終焉を迎えたのか、もしくはそうではなく、例えば Virginia Woolf の *Between the Acts* (1941)に見られるように、異化とは異なる新たな形への胎動も見せていたのではないか、というものであった。先行研究では、例えば Meghan Marie Hammond の *Empathy and the Psychology of Literary Modernism* において、Woolf と同時代作家である Ford Madox Ford、Katherine Mansfield、Dorothy Richardson の作品などが相互参照的に論じられ、それぞれの作品に異なる形で共感の不可能性が描かれていると主張されていた。本研究は、この主張に反対し、自他の新たな結び付きを目指すエクリチュールが、少なくとも Woolf の *Between the Acts* には見られることを論じた。この主張を出発点とし、Woolf が同時期に書き上げた、Bloomsbury Group に所属していた美術評論家 Roger Fry の伝記（*Roger Fry: A Biography*）にも、他のモダニストたちの作品とは異なる共感の姿を認めることができることを明らかにすることとした。従来まで、*Roger Fry* は伝記の主題である Fry 自身の姿が見えない失敗作だという評価、つまり Woolf が Fry に共感できていないという評価が下されてきたが、留意しなければならないのは、この伝記には共感とディタッチメントの双方の現象が見られるということであり、この異なる心理の共存には、共感の新たな側面を探る足がかりが存在しているということであった。これまで論じられてこなかった共感とディタッチメントの共存を踏まえて *Between the Acts* を読解することが、芸術分野における共感の変遷を辿る上で重要であることを論証すべく、この方面に研究を進める方針を採った。

この点を深く考察するために、同情から共感への移行をさらに広く歴史的に検証する必要があった。そのため、初期～盛期モダニズムに至る過程で発表された Forster の *Howards End* (1910)と *A Passage to India* (1924)を研究対象とすることにした。階級闘争と個人の結合が主題として描かれる前者において、社会的他者に対する同情心はどのように表象されていたのか（もしくはいなかったのか）、また後者において、共感は可能なものとして描かれていたのかを解明することを、研究期間二年目の目的として設定するに至った。

３．研究の方法

本研究では、日本ではまださほど研究が行われてこなかった共感研究の立場から、イギリス・モダニズム文学を小説、伝記、絵画というようにジャンル横断的に研究する方法を採用した。本研究が研究目的として掲げたように、Woolf と Forster の創作に多大な影響を与えた Bloomsbury

Group の美学、すなわち近代イギリスの美的感性を醸成した Fry らによるフォルマリズム的アプローチと、Woolf たちの小説と伝記の交点を探り、そこから文学的概念としての共感の妥当性を論じたものはまだ存在していなかった。Woolf の伝記は、Fry の人生とパーソナリティに対する彼女の共感を言語化したもので、この伝記の執筆に触発されてか、同時期に彼女は "I"ではなく "We"を描くと日記に書き留め、*Between the Acts* の執筆を進めている。両作品を個と集団に対する共感という観点から考察することは、盛期モダニズムに発表された彼女の *Mrs Dalloway* や *To the Lighthouse* における、個の内面への極端なまでの没入、すなわちモダニズム的共感が、1940 年代までにどのような歴史的変遷を辿ったのかを明らかにする手掛かりとなるものであった。また、Woolf と同時代作家であった Forster の作品、特に *Howards End* は、他者との結び付きを求めた作品であり、"Only connect . . ."というエピグラフが付けられている通り、Woolf の用いた意識の流れという手法とは異なる形で、自他の結合を目指した作品であった。これらの作品を考察対象として本研究が明らかにしようとしたのは、同情から共感、そしてその不可能性への変遷に関する先行研究の主張の限界であり、また、これまで論じられてきたものとは違う共感の姿であった。

まず初年度は、Woolf の *Roger Fry* および *Between the Acts* を共感という観点から読解し、第二次世界大戦の危機を乗り越えるための新たな共同体意識が Bloomsbury Group から生まれようとしていた可能性があったことを明らかにするものとした。翌年度は、Forster の *Howards End* と *A Passage to India* に見られる共感の作用を解明し、それを初年度に明らかにされた Woolf の共同体意識と比較する、という手法を採用することにした。

４．研究成果

Forster と Woolf の所属していた Bloomsbury Group の活動を、文学と絵画、伝記という観点から研究することにより、イギリス・モダニズム期における同情と共感の変遷の一端を明らかにすることができた。

(1) 初年度は、国内外におけるアフェクト研究の成果を踏まえ、共感研究が発展させてきた理論を駆使しながら、Virginia Woolf の作品を研究対象に設定することで、共感の表象および歴史的変遷の新たな知見を示した。 6 月に共感をテーマに掲げた Modernist Studies in Asia において、"Virginia Woolf's Empathetic Writing in *Roger Fry* and *Between the Acts*"と題し、イギリスにポスト印象派を紹介した Fry に関する Woolf の伝記と、彼女の晩年の小説における共感の表象の関係について発表した。この段階で、Woolf が単なる共感だけでなく、それを通じたディタッチメントも伝記中で示していることが明らかになった。このフィードバックを基に、11 月には Asiatic Society of Japan において、Woolf の作品に見られる印象主義的手法である意識の流れの手法と、Roger Fry の評価した Post-Impressionism の技法の交点を共感という観点から提示した。

(2) 2019 年度は、まず Forster の *Howards End* を共感研究の観点から分析した。*Howards End* は、19 世紀的同情のリアリズムから、モダニズム的な共感のナラティブへの過渡期に位置付けることができる作品である。本作の特徴は、伝統的な作品の系譜に連なりながら、モダニズムを飛び越えてポストモダニズム的であるとさえも言われるような、急進的な語りを見せる部分にある。歴史的な感情であるとされる同情／共感の観点からこの両義的とも言える語りを分析した場合、*Howards End* にはどのような歴史的局面が反映されていると考えられるのだろうか、という問いを立て、本作のエピグラフである「ただ結びつけよ…」から考えてみるに、Leonard Bast のような中産下層階級に属する社会的弱者に対する同情は、もはや現実的な解決策とはならず、Wilcox 家的な商業か、もしくは Schlegel 家的な芸術のいずれかという選択肢も、決定的な判決を下すための前提とはなってはいなかった、という結論を導き出した。単なる同情でも共感でもない、ただ結びつけるというリベラル・ヒューマニズムの態度にこそ、Forster 独自の他者理解が見られる。

また、Virginia Woolf の *Flush*（1933）における、人間と犬という異なる動物同士の認知上の差異および共感の作用についても研究した。Flush は、ヴィクトリア朝を代表する女流詩人、Elizabeth Barrett の飼っていた犬だが、彼の五感は、この詩人をもってしても理解することのできない世界の諸相を探り当てる。この点には、人間の知覚の限界の提示および文学の新たな可能性の模索という、モダニズム文学を考えるうえでも非常に重要な特徴を発見することができた。このように、二年間の研究を通じ、イギリス・モダニズム文学における共感の表象が様々な形を見せるものであり、それはヴィクトリア朝的同情の限界を乗り越え、時にディタッチメントをも引き起こし、また、種族を越えた相互理解すら図るものであったことを明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 岩崎雅之	４．巻 51
２．論文標題 E. M. Forsterのリベラル・ヒューマニズム――同情と共感を超えて	５．発行年 2020年
３．雑誌名 福岡大学人文論叢	６．最初と最後の頁 987-1001
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 Masayuki Iwasaki
２．発表標題 Virginia Woolf's Empathetic Writing in Roger Fry and Between the Acts
３．学会等名 Modernist Studiees in Asia（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Masayuki Iwasaki
２．発表標題 Virginia Woolf, Post-Impressionism and Empathy
３．学会等名 Asiatic Society of Japan（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Masayuki Iwasaki
２．発表標題 Modernist Ecological Imagination: Woolf’s Empathic Writing in Flush
３．学会等名 The 4th Japan-Korea International Virginia Woolf Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考